

令和5年度第2回杜陵高等学校 学校運営協議会 議事録

期 日 令和6年2月9日（金）
時 間 14:15～16:45
場 所 杜陵高等学校 視聴覚室
出席者 学校運営協議会委員 14名（欠席 両方義人 委員）

開会行事

- ・バイオリン演奏 定時制3年次 佐藤 雛歌
- ・朗読 定時制2年次 藤原 汐音
- ・生活体験発表 通信制 中軽米 あゆか
- ・通信制課程紹介 通信制生徒会 水野 花梨、小保内 康佑、中澤 遼介

学校概況説明

三田 正巳 校長

本校定時制・通信制の生徒たちの活動を紹介した。本日来校の写真家の足利文香さんが昨年から生徒の様子を撮影し、学校での日常生活や頑張りを記録に収めている。学校では様々なイベントが開催され、本年10月12日には創立100周年記念式典が控えている。式典においては、生徒たちの気持ちを高めて盛大に祝いたい。学校は地域の協力を得ながら、日々の学習活動以外にも様々な活動を展開している。ホームページやnote、マスコミを通じた情報発信も積極的に行っている。委員の皆様には、多大なる協力に感謝申し上げます。生徒たちの成長と変化が活動を通じて目に見え、学校の特徴をいかした運営を推進していく。

※動画にて以下のニュース映像を紹介した。

- ①県内の定時制通信制高校の生徒を集めた定通交流会「いわてT2さみっと」
- ②駐車場の木にイルミネーションを飾り癒しの光を灯す「イルミネーションプロジェクト」
- ③ハロウィンターナショナルスクールダンス講師の協力を得た100周年にむけての「全校ダンス」

※補足として、副校長が本校ホームページとnoteについて紹介した。

フリートーク

千葉 仁 委員

約50年前に本校を卒業した。バイオリン演奏や朗読、生活体験発表を通じて生徒たちの多様な取り組みに感動を覚えた。「青春の記録集」を読み返すと学びを得て元気づけられる。生徒たちの努力や成長に触れながら、座学だけでなく感じながら失敗し学ぶことは重要である。100周年企画については生徒主体の経験は高く評価できる。前向きな雰囲気を感じる一方で、前面に出ることの成果だけでなく課題もあるはず。時代とともに変わる課題に対処しつつ、本校の発展を願う。

三浦 隆 委員

報道では知っていたが、朗読の藤原さんと生活体験発表の中軽米さんの素晴らしい発表を生で見られて良かった。また、note のカレー選手権の発想に驚いた。柔軟な発想や生徒たちの生き生きとした表情が良かった。中学から杜陵高校に進学する生徒たちの挑戦に敬意を表し、中学校で悩んでいる生徒たちに未来が広がっていることを伝える必要性を強く感じた。また、逆に杜陵で輝くために必要な環境が中学校で提供されていなかったことに気づき、今後の改善点だと感じている、今後も変化を促進していく必要がある。

本山 敬祐 委員

コミュニティスクールの会議が楽しい上質な時間になっている。生徒による発表を通じて杜陵高校の楽しさや魅力を感じた。生徒たちの才能に感激するとともに自らの人生物語を紡ぎ直す喜びを実感した。教師や保護者、委員の伴走・支援が杜陵高校の魅力をつくりあげていると確信している。尊敬できる大人との出会いは重要である。100周年に向けて、従来の学びのセーフティネットとしての役割のみならず楽しさを求めて入学する生徒の増加を期待する。学校見学で振り返りと目標の一文字に感動し、生徒たちの前向きな意欲に触れ、望みを大切に作る関わりができればと感じた。学校の役割として、在籍する生徒たちの望みを守り育てることを期待する。

加藤 源広 委員

開会行事に度肝を抜かれた。バイオリンの演奏から始まり、会議次第を見て本日の会議がどのように展開されるのかと期待し、「さすが杜陵高校」と感じた。不登校支援に携わっている。特に通信制や定時制の学び方の変化について言及し、生徒たちに時間の使い方を上手にすることの重要性を認識した。杜陵高校が生徒たちに丁寧なサポートを提供し、良い体験をさせている様子を感じ、今後も教職員のサポートに期待し、生徒たちが楽しみながら学校生活を送ることを望む。

吉田 真雄 委員

去年8月に上田商店街の夏祭りに定時制生徒に協力してもらったが、予想以上の集客のためにフォローできず申し訳なかった。杜陵高校の情報発信を通じて、特技のない生徒たちにも注目が集まり、その活動が広く知られていることに感謝している。これを機に小中学生に杜陵高校の魅力を発信し、彼らが未来に向けて多様な選択肢を考えられるよう助力してほしい。盛岡市外の学校においては、杜陵高校に関する情報が不足していると感じる。他の地域や親などに対しても積極的な情報発信が必要である。

小田 加代子 委員

入院生活中、癒しに感じたイルミネーションの灯りを杜陵高校も取り組んでいたことに感激した。指導にあたった中軽米さんの生活体験発表やT2サミットでの発表に至るまでの生徒の苦労や成長を共有することができた。活動を共にして杜陵高校には豊かに育っている生徒がいて、本当に嬉しく思う。現在の杜陵高校が開かれた学校であることを評価する。多くの学校を取材して、校長先生が変わると、途端にクローズされたりすることを見てきたので、何とか三田校長先生のように開かれた学校運営をぜひ継続してほしい。

赤石 真美 委員

開会行事に感銘を受けた。中軽米さんの作文添削に携わった。中軽米さんの作文は、文章力が優れており、生の声や叫びが伝わり、胸に深く響いた。文章を綺麗に直す必要がないと感じた。今日、中軽米氏の声に乗せて初めて聞くことができ感動した。また、「T2さみっと」において、定時制通信制の生徒たちが自分の考えを持ち、他者の意見を聞いて深めていく姿勢に感心した。メディアやSNSでの情報発信にとどまらず、リアルな場での次の世代との交流が杜陵高校の魅力を伝える効果的な手段であり、これによって次の世代への良い影響をもたらすと考える。

佐藤 清一 委員

ある教員との出会いにより子の才能を見出され、進路を考えるきっかけを与えてくれた。これだけ楽しい学校生活を送らせていただくだけでなく、次の目標を見えるような形、1人1人の個性を見つけてくれる学校であると感じる。自分も教員だが、杜陵高校は度量が大きく、受け入れ態勢があると感じる。杜陵高校を見学してきた生徒が、気持ちが楽になったと話していた。学校によって生徒に出来ること出来ないこといろいろあるが、杜陵高校では様々な生徒を引き受けていただけて大変ありがたい。個人的に杜陵高校のnoteを愛読しており、校長先生が担当していることに驚いた。

水野 洋子 委員

学校を選ぶ際、子どもたちの意見を尊重した。杜高祭を見学し、特に定時制の生徒たちの生き生きとした自由な雰囲気魅了された。絵画を鑑賞していたところ、一人ひとりにじっくり向き合い、待つことが大切だと話してくれた先生の姿勢に感銘を受けた。この姿勢が生徒たちに素晴らしい結果を生むと感じ、杜陵高校への入学を決意した。杜陵高校は謎めいていたが、ネット上の口コミによると学校への愛が感じられ、良い学校であると確信した。校長先生が率先してnoteの記事を書いている姿勢に感銘した。この高校は、隅っこにいる子も含め、一人ひとりにスポットライトを当て、愛情を注いでくれる学校である

熟 議

司 会

「不登校増加の現状から、学校に行けないのはなぜか？こうやったら行けるようになるんじゃないか？あるいは、学校は本当に必要か？」

赤石 真美 委員

学校の存在意義を考えるのは難しい。学力向上や人間関係の形成は重要であるが、生徒たちの苦悩にも目を向けるべきだと感じる。杜陵高校はこの視点を大切にし、生徒一人ひとりに細やかな気配りを示している。なぜ、今の高校生が苦しんでいるのか？自分たちが高校生の時代には学校への通学が当たり前とされてきた中、現代の高校生は常に何かに追われ、その理解とサポートが求められていると感じている。生徒たちに寄り添い、理解し、救済できる存在が求められている中で、先生方も多忙な中、その一人一人に声をかけることが難しい状況にあるのではないかと

本山 敬祐 委員

不登校児童生徒の増加について、コロナや心の問題だけではなく、社会の変化と学校制度のミスマッチが問題であろう。余暇の多様化やインターネットの普及により、学校での伝統的な学び方が時代に合わなくなっており、学校外での学びや経験が重要である。また、学校が将来のメリットのために今を我慢する仕組みになっており、立身出世が現代の子どもたちにはリアリティとして捉えられない、今と未来を豊かにできる学びや経験が必要だ。リアルな出会いや人間関係が学びの場を与えている杜陵高校の取り組みがその好例である。

千葉 仁 委員

自我の目覚めや好みの違いがトラブルの原因であろう。自分は学生時代に自分が崩れていく感覚を経験した。しかし、その経験が自分で考える力を養い、自分の道を見つけるきっかけとなった。学校が提供する情報や友達との出会いが、学びと成長の重要な要素であった。杜陵高校の特徴として、気づくまで待つとか、やる気になるまで待つという空間がきっとこの杜陵にあると思う。画一的な教育ではなく、個々の生徒に合った出会いを提供する姿勢がある。他者との比較ではなく、自分を理解し、生き方を見つけていくための環境が大切である。

司 会

「本日オブザーバーとして参加している通信制の生徒から発言してもらいます。」

通信制生徒①

中学校時代の部顧問の先生は周りの生徒にはあまり慕われていなかったが、自分が進路のことに悩んでいた時に親身に相談してくださり、杜陵高校を紹介してくれた。この先生の存在が大きかった。

通信制生徒②

中学校時代に進路相談をした際に、定時制や通信制は怠けた人が行くところだからやめた方がいいと言われた。その言葉が何回も思い出されて、どうしよう、自分は駄目な方向に行ってしまうと心配したが、杜陵に入学して、そういうイメージもだんだんなくなり、先生方もたくさん生徒のことを考えたり親身になって相談してくれたりすることが多くて、いい学校だと思っている。悩んでいる周りの生徒に教えていきたい。

通信制生徒③

論理国語で「他者に流されて形成されていく私」という言葉があった。学校に行くうえで、他人との関わりは避けられないので、どんどん自分が変わっていく、猫をかぶったり嘘をついて、本当の自分がわからなくなってくる。また、将来のことをいろいろ考えたりして、親にもいい感じに猫かぶったりする。そしてだんだん自分が疲れてしまい、人との関わりを避けたくなる人が増えて不登校になる人もいると思う。

三浦 隆 委員

日本では学校内での協調性や一致団結が強調されるが、現在では生徒たちが同じ方向を向くことに価値を見出す傾向に変化が生じている。学校現場では個々の多様性や異なる学び方に十分に対応できていないと感じている。現在の状況に対応するために、学校が柔軟で多様な学び方を認め、居場所を提供する取り組みが必要である。具体的な試みとして、学生たちが好きな勉強をし、悩みを共有できるスペースや校内フリースクールの設置が考えられるが、マンパワーの不足により全ての生徒に対応できない課題もある。個々の生徒の異なるニーズに対応し、学び方や居場所を提供するために、教員や社会全体の意識の変革が必要である。

吉田 真雄 委員

学校以外の選択肢を多様化する必要がある。学校に行かないことが悪いことではないが、他者との交流や創作活動の場が重要であり、家で一人で SNS を見るだけでは孤独感を感じる。特技がなくても他者と関われる場所があると良い。「東京コーヒー」のように、そのような場所を提供する取り組みや活動が存在する。学校の先生たちも我慢強い一方で辞める人が多い。学校の教員に対しても理解と柔軟な考え方が求められている。学校に行けないことに悩む子供たちが安心して話せる場所が重要であると強調し、杜陵はそうした場を提供する存在でなければならない。

水野 洋子 委員

先生方との面談等を通じて、幼稚園のように隅々まで行き届いていて、些細なことまで見ていただいているっていうことに驚き、ちょっと甘やかしすぎではと思ったぐらいで、本当にありがたかった。

佐藤 清一 委員

同じ悩みを共有できる生徒が周囲にいる。それぞれがみんな優しく接してくれるから、自分もそうなりたいと思えている。杜陵の特徴でもある、様々な苦しい経験をした多様な生徒と出会えるというところがありがたい。

小田 加代子 委員

学校が必要かどうかについての答えは難しい。生活体験発表の指導を通じて、自分の好みを否定されることで深い悩みになる可能性があることを感じた。学校が苦手な子どもたちに対して、先生たちが自分の好きなものを否定せずに尊重する姿勢を持つことが大切だ。大人がその子どもたちをサポートし、得意な好きなものを極める姿勢を持たせて欲しい。

加藤 源広 委員

学校には学習と社会性の両面での機能がある。キャリア指導では特に社会性の養成が重要である。学校が学習の場として見なされている一方で、個々の生徒が学びの多様性を発揮できる仕組みが不足していると感じている。細やかな配慮はいいが監視になってはならない。そのため、教育者は細やかなサポートと同時に、肯定的に待つ姿勢を持つことが求められる。

司 会

「学校運営のヒントを多数いただいた。今後とも委員の皆さまにはご協力をおねがいします。」

連 絡

- ・ 学校評価についてコメント回答のお願い（2月22日まで）
- ・ 来年度の学校運営協議会の日程と委員継続についてのお願い。

閉 会 16:45